『東方』二七七号より

容易ならざるアジア人が見たヨーロッパ

橋本 雄一（千葉大学）

「杉原ビザ」で知られる杉原千畝は、リトアニアのカウナスにあった日本領事館で、ナチスドイツの迫害にさらされる現地ユダヤ人に日本ビザを発給した。その杉原は「満洲国」外交部にいた一九三二年一二月、官吏登用試験の試験官を務めている。「満洲国」が成立して十か月、そのとき一人の中国人青年が合格する。名を王替夫、辛亥革命の一九一一年に吉林省永吉県に生まれる。

本書は、「満洲国」の外交官としてソ連とドイツに派遣された王替夫の自伝である。日本敗戦後は戦犯としてソ連に抑留された王は、今なおハルピンに存命である。王の名は四〇年一二月発行の満蒙資料協会編『満洲紳士録　第三版』（現在、日本図書センターより復刻）に見え、「勲七位、駐徳意志国満洲公使館理事官補」といった説明がある。「満洲国」についての中国側証言としては、教育事情にかんする複数の証言を省市誌レベルで集めたものなどが多いが、一人の人間がこれだけ語った一冊というのはきわめて珍しいだろう。

監修者はまず、第二次大戦という「人類の運命を決定づけた生と死のもだえと格闘のなかで」「中国が担った歴史的役割」と「人類の道徳と尊厳を擁護するためになした中国の貢献」とをどのように考量すればよいのか、と問う。

ヒトラーの始めた侵略戦争の実地の検証人は広大なこの中国にいるのだろうか。長い長い失望と期待のときを経て、ついにそのような人物が現れた。その人物とは「満洲国」駐独大使館の高級外交官、王替夫であり、いまは中国東北の地にひっそりと隠居している老人である。（「前言」より）

王替夫口述・楊明生執筆
『見過希特勒与救過猶太人的偽満外交官』
二〇〇一年・黒龍江人民出版社・九五〇円

たしかに王自身による本自伝は、「満洲国」の外交官としての内幕暴露というよりも、王替夫という人間の眼で見たヨーロッパ事情という性格が濃い。人目をそそるように書名に押された偽満外交官との刻印に反して、本書のコンセプトにその地位に対する政治的追及という意味合いはない。逆に言えばこの姿勢は、日本植民地下の「協力者」という地位にあった者だけが眼にし得た事実への新たな価値づけとも言えよう。それは本書が語る最大の出来事、すなわちベルリンの公使館駐在期（三八年一二月から四四年九

クリックすると次の段にジャンプします。

月）における、ユダヤ人へのドイツ脱出ビザの発給にも明らかだ。「自分一人だけでおこなったのではない」と冷静に前置きしつつ、ユダヤ人への王個人の同情という動機もあってなされた行為を、淡々と振り返っている。

それにもかかわらず本書の核心は、実はそのヨーロッパ体験のもう一つ先、あるいは矛盾するが、その手前の地平にあると言わねばならない。読み進めていけばすぐに判るのだが、体験がことあるごとに或る一つの自省に伴われている。つまり王自身が「満洲国」という傀儡国家の外交官であるという罪悪感からの自省である。同胞が抗日戦争を展開する流れのなかで、自分は日本人のつくった「満洲国」のために働いているという苦悩の自省は、彼のヨーロッパ体験にねじれを与えていく。

そのねじれは、先述した対ユダヤ人ビザ発給という出来事にもうかがえる。当時のヨーロッパ諸国は概してユダヤ人によい感情を持っておらず、積極的に受け入れていたのもアメリカだけだった。そこでドイツ外相、リッベントロップは、ユダヤ人の「排出」方法として、ポーランド―ソ連―「満洲国」―大連―上海―アメリカというルートに眼をつけた。そのドイツ外交部の要請を受け、「満洲国」政府の許可も得た上司である呂宜文公使は関連事務を王に一任。ナチスの対ユダヤ政策を日頃から危険視していた王の気持ちは高ぶる、「ユダヤの人々が自由を得るために尽力することは、道義上当然のことだ」。こうして三九年六月、ビザ発給が始まった。三か月後にポーランドに侵攻し大戦の種をまいたドイツ政府はユダヤ人ゲットーを作り始め、今度は、ビザ発給もはや必要なしとの通達を呂公使に。のちの枢軸陣営としての連帯を強める日本人側も「ドイツの言うとおりにせよ」と要求してきた。それではドイツや日本人の操り人形ではないかという「屈辱感」から、王は呂公使に食ってかかり、ひそかに発給を続けることを認めさせる。助手として雇っていたドイツ婦人とのビザスタンプを押す作業は、四〇年五月まで一年間続き、およそ一万二千人のユダヤ人に発給したという。この行為は「功績」などではないが、長い外交官生活を振り返ったとき唯一心慰められることだ、と現在の王は言う。

トップページにもどる

ソ連、フランスやスペインといった国々での体験も詳述される。三二年一二月、最初に赴任したチタ領事館では日々、シベリア鉄道で帰国する中華民国のヨーロッパ留学組や民国政府関係者を常にソ連のスパイとして警戒した。王が入境を許可しても「満洲国」内では特務機関が手ぐすね引いて待っている。自分の属する「国家」が同胞を迫害していることに心を痛め、「日本人の利益のためになす罪悪という泥沼は、自分がそこに落ちていくほどに深くなっていく」。呂公使に同行してベルリンに向かう途中、大阪に立ち寄ったのは日中戦争勃発後一年あまりの三八年九月。慰問した日本人負傷兵に呂公使が語った言葉、「遠い中国の地で天皇陛下のためにお働きになり、ご苦労様です。早くよくなって戦場に捲土重来して下さい」、に違和感を覚える王。しかし何よりもそれは自分たちの置かれた立場を思い知らされた瞬間だったという。

こうした内心の葛藤はもはや、アジア人による単なるヨーロッパ見聞録ではない。容易ならざるアジア人の自省は、ヨーロッパの各所で、シベリアの収容所でつきまとう。自らの影のように。王がじかに接したヒトラーの人物像や溥儀の人物像についての活写も興味深い。だがここに語りの術を与えられたこの自分の影こそ、当の王替夫という証言者に今また挑んでくる。そのような書を日本人はど

う読むべきか。

ロシア人と商売する父の影響を受け、中学からロシア語を学んだ王は、当時の軍閥政治の腐敗に憤り法律を学ぶことを決意、ハルピンの大学に進んでドイツ語と日本語の才も発揮する。卒業の年に「満洲事変」が勃発、同級生とともに抗日将軍、馬占山を支援して募金活動に奔走。さらに三二年五月にハルピンに来たリットン調査団に、日本の侵略行為を訴える手紙を個人名で書き送り、特務機関に逮捕されている。そのような民族意識をもった青年がなぜ、「満洲国」に使われる役人になったのか。この疑問を後世の我々は免れ得ない。詳しい経緯は本書にあるが、そのような疑問は、図式的に「満洲国」成立の前と後を区切り、そこに一つのパラドックスを見ようとする我々の欲望のメタファーである。現にその場に投げ込まれている生身の人間は、そのパラドックスを結節点として生きていくしかない。官吏になる前の民族の気概にあふれた行動は、反復されるうしろめたい自省として、「満洲国」の官吏となった王替夫のなかでつながっている。

ところで、彼が外交官の道を歩むきっかけとなった「満洲国ハルピン外交特派員公署」の人員募集広告は、ハルピンの中国語紙『国際協報』に載った。蕭軍がいまだ日本側に買収されない同紙編集部に接触し、その副刊『国際公園』に作品を載せたのは三二年四月。蕭紅の最初の小説「王阿嫂的死」が掲載されたのも、王の受験の時期をはさんで『国際協報』の三三年新年増刊号で、蕭紅は懸賞金を獲得する。三四年半ばまでハルピン新文学の一拠点ともなる新聞である。王替夫と東北流亡文学者という双方の相容れぬその後の歩みを考えるにつけ、この時期のメディアがのっぴきならない性格を持っていたことを思い知らされる。

トップページにもどる

ベルリン公使館の日本人参事官に付き添って、パリを視察した王。とある公園では老人に「あんなに大きな中国がどうして小さな島国の日本、しかも背の低い日本人にやられっぱなしなんだ」と問いかけられる。老人はさらに、「あんたを見る限り、そんなに弱い東アジアの臆病者には見えんが」（王は十四歳のころすでに身長は一メートル七十センチあった）。「自尊心と屈辱にさいなまれ」早々に立ち去る王は思う、「自分が「満洲国」の外交官だというのを明かさなかったのは幸いだった」。またスペインではフランコ政権がなり、汪精衛が南京政府を代表する流れのなか、駐スペイン中華民国公使館が撤退。マドリードになお滞留する民国外交官を、「満洲国」公使館設立のために買収する役目を任される。国家を鞍替えしたらスペインの華僑に恨まれると恐れる相手も最後は承諾。このくだりは外交官という仕事の生ぐささと、かなしさを教えてくれる。

本書にはナチス台頭以降のヨーロッパ史、ユダヤ人のシオニズム運動史の解説が随所に盛られる。体験を分かりやすくするための後からの説明であり、あるいは王の口述を編成し直す監修者の技術かも知れない。では本書の特徴として指摘した苦悩の自省も後からの説明ではないのか、という疑念が発生し得るかも知れない。とくに今日の日本に、帝国日本がおこなった戦争や植民地支配についての他者の語りを、眉に唾をつけて聞く風潮と思考が一部にある。どんな言説も「語り」であるからには、語るための方途がそこにあることは否定し得ない。だがそれはすべての語りを方途のかたまりにして、均一化するに足る理論でも何でもない。この拙評を書く直前にも、当時の日本軍が遺棄した毒ガス兵器がチチハル市で発見され、人命が失われた。それは我々にとってはメディアを通した「ニュース」

という語りの方途でもって現れるが、そこには「語り」だけではすまない何かがある。それは事実であり、次にそれは事実の意味である。そのような意味の重みが本書にもある。

王替夫の名は、長春や吉林の『文史資料』にある「偽満洲国人名鑑」や『民国人物大辞典』のたぐいを評者が繰った限りでは出てこない。無名ということにもさまざまなレベルがあるが、彼を知るには「満洲国」当時の『紳士録』でしか情報が得られないという事態は何を意味するのか。いまだに植民地権力のエリクチュールが現在に作用し、その力に今なお囲い込まれている「満洲国」政府の中国人関係者。しかもそこには、王替夫内部の自省――それは程度の差はあれ、「満洲国」下の中国知識人が広く共有するものではないかと評者は予感する――は表され得ない。それだけに本書のような証言の一冊が刊行されることは、関連の研究者として、また広く読者として心強い。いつまでも溥儀『わが半生』の類いしかないのでは困るのだ。

今月の『東方』
書評目次へ
トップページにもどる